

伊豆聖マリヤ教会の歩み

はじめに

伊豆聖マリヤ教会は 1949 年(昭和 24 年)3 月 23 日のマリアみ告げの日(当時はマリア蒙告日)に、後に司祭となられる宮沢寿兄宅にて伊豆伝道開始記念の礼拝をもってその歩みを始めることとなります。2019 年に、宣教開始 70 周年を迎えました。

この冊子は、伊豆聖マリヤ教会の信徒諸氏の協力を得て、ささやかながら、70 年の歩みを振り返るべく作成されたものです。

ご一緒に、伊豆の地での伝道の歴史を振り返って参りましょう。

1. 福音の種

伊豆半島の伝道に最初に注目したのは、SPG 宣教師の A. ロイド師でした。同師は慶応義塾大学でも教鞭をとっていましたが、その時の教え子の 1 人が葦山で中学の教師をしており、彼を訪問するために、1887(明治 20)年に葦山を訪れます。その時に、教え子の感化で入信を決意する者が 7 名おり、同年 3 月にロイド師は洗礼式を執り行いました。それから、ロイド師は伊豆半島に足を運び、1891(明治 24)年には、伊東に講義書を開設し、1902(明治 35)年 5 月まで伊豆半島の伝道が続けられることとなります。それからしばらくの間、伊豆半島における伝道の働きは休止していたのか、あるいは細々と存続していたのか定かではありません。

1917(大正 6)年、宮沢九万象執事は任地の小田原より伊東に行き、伝道活動を改めて開始したことが記録に残っています。以後、一色榴吉司祭、吉沢直江司祭の両名も訪問することとなります。

1935(昭和 10)年からは、沼津聖ヨハネ教会の管理の下で伝道活動が続けられました。

2. 伊豆伝道ミッション開始まで

①草創期

1947 年(昭和 22 年)、オーストラリアより一隻の軍用船に乗ってやってきた宣教師、F・W コールドレーク司祭は広島県呉市に上陸後、即日上京し、逗子聖ペテロ教会(主教座)で須貝止主教らと面会します。

戦中に敵性宗教としてスパイの疑いをかけられ巣鴨の拘置所に勾留されていた須貝主教は出所後、骨と皮ばかりの状態となり、体重は 30 キロ台まで痩せ落ち、心身ともにくたびれたご様子で逗子の地で静養されていました。

オーストラリア聖公会がコールドレーク司祭を派遣するのは、そんな戦後の混乱期であったのです。残念なことに、伊豆伝道の立役者の一人、コールドレーク司祭が日本で初めて会った主教、須貝主教は、拘留時の拷問による精神的疲労が重なり、1947 年 8 月 13 日にこの世を去ることになります。

須貝主教の逝去を受けて、翌年の 1948 年 2 月に新たに教区主教に就任したのは、ライト前川眞二郎師父でした。

同年、1948 年 11 月(昭和 23 年)、クリスマスに差し掛かろうという頃、前川主教は、日本国内の聖公会教会に対して、戦争中の混乱期に伊豆半島に疎開している信徒の調査を要請しました。

その結果、三島市を含む伊豆各地に 7 家族 20 名が疎開地として居住していることが判明します。

このことをきっかけに、前川主教は、コールドレーク司祭に伊豆伝道を託し、副牧師に飯田鳳夫司祭を任命しました。

その翌年、本冊子の冒頭でもご紹介したとおり、1949年(昭和24年)3月25日、マリア蒙告日(現・聖マリヤへのみ告げの日)に、コールドレーク司祭を始め、教区常置委員、列席のもと、伊東市瓶山の宮沢寿兄宅にて記念の聖餐式を献げ、「伊豆伝道ミッション」を開始。以後、宮沢寿兄宅にて、主日礼拝を守っていくこととなります。



この時の記念礼拝に出席したのは以下の諸氏でした¹。(敬称略)

- | | | | |
|------------|--------|------------|------|
| 伊豆信徒 | | 宮沢寿 | |
| 横浜山手聖公会司祭 | 教区常置委員 | | 岩井克彦 |
| 小田原信徒常置委員 | | 田辺一雄 | |
| 川崎 司祭 | 財務部長 | | 村岡米男 |
| 平塚 司祭 | 常置委員長 | | 豊田秀二 |
| 逗子信徒常置委員 | | 服部忠直 | |
| 伊豆 司祭 | | 飯田鳳夫 | |
| 伊豆 司祭 | | エフ コールドレイク | |
| 横浜聖アンデレ 司祭 | 常置委員 | | 林 五郎 |
| 小田原司祭 | | 宮沢九萬象 | |
| 南東京教区主教 | | 前川眞二郎 | |

¹ 職位・役職等は伊豆伝道開始記念聖餐式の際の本人ら署名のまま掲載している。

日本が、戦後の混乱から復興していく、この時期、伊豆の地に、福音の種が撒かれ、豊かな実をつけるための働きが始まった瞬間でした。

3. オーストラリアからの福音の種

①コールドレーク司祭の略歴(Fr. Frank William Coaldrake)

前項に記載した伊豆聖マリヤ教会草創期の教役者、フランク・ウィリアム・コールドレーク司祭について触れてみることにいたします。なお、時系列で把握することができるよう、本冊子では箇条書きでコールドレーク司祭の略歴を紹介することにしました。

- 1912年3月12日 オーストラリアのブリスベンで誕生。
- 1934年 クイーンズランド州チャーラヴィル青年院長の務めを担いながら、高校生に木工を教える。(1936年まで)
- 1937年 オックスフォード大学より奨学金を授与され、哲学の研究を進められるがこれを辞退。同年、オーストラリア国立学生組合初代会長に就任。また、1939年までの2年間、オーストラリア学生キリスト教運動渉外部長を務める。
- 1939年 メルボルン教区聖ローレンス修道会に入会。市内のスラム街で貧困層のために救済活動に携わる。(1945年まで)
- 1942年 メルボルン聖パウロ教会リーダーに就任。同年、クイーンズランド大学大学院修士号取得。オーストラリア神学大学修了。卒業後と共に、

- 執事職叙任。ジーロング地区で勤務する。
- 1943 年 司祭職叙任。メルボルン大聖堂において司祭
按手を受ける。
- 1945 年 政府に、日本渡航願いを提出。シドニー大学
で、日本語、日本史、人類学を学ぶため、シ
ドニーに転居。同年、シドニー教区ローレン
スキリスト教会にて副牧師として勤務。
- 1947 年 6月11日の使徒聖バルナバ日に、日本に上陸
広島県呉市から即日、上京。日本聖公会の宣
教師として、小田原聖十字教会の副牧師に迎
えられ、その後、伊豆伝道ミッションの責任
者に就任。伊豆半島地域にて家の教会を設立
し、宣教に務める。
- 1949 年 オーストラリアへと一時帰国。タスマニア聖
公会青少年部担当のメイダ夫人と聖婚。伊東
に戻る。
- 1952 年 第一子、長男ウィリアム誕生
- 1955 年 第二子、長女マーガレット誕生
- 1956 年 シドニーのオーストラリア伝道会会長に任命
され、帰豪。
- 1957 年 第三子、次女キミ誕生
- 1960 年 カーペンタリア教区オールソールズ大聖堂参
事会員に就任。
- 1970 年 ブリスベン教区兼クイーンズランド管区大主
教に選出され、被選大主教となるも、按手前
の7月22日、シドニーにて逝去。享年58歳。
戦後の日豪関係改善に大きく貢献した。

③コールドレーク司祭の来日目的と背景

コールドレーク司祭は、1939年にはすでに日本の地へと旅立つことを切望しオーストラリア宣教協会(Australian Board of Missions)に日本派遣を働きかけていたといいます。しかし、当時の国際情勢がその希望を阻み、師の願望が叶えられたのは、1947年6月のことでした。なぜ、師が日本での働きを願ったのか。



師の思いを知るには、日本とオーストラリアの関係を知る必要があります。

戦前のことについては、割愛いたしますが、1942年～2月から1943年11月までの期間にわたり、大日本帝国海軍および大日本帝国陸軍の航空機はオーストラリア本土、地域の主要空域、周辺諸島、沿岸輸送ラインの船舶に対して大規模な空襲を行いました。これら一連の空爆による死者は400人以上、負傷者1,000人以上が出たとされ、さらに旧日本軍は軍事施設や軍用兵器類だけではなく、港湾や民間管理の飛行場、鉄道や燃料タンクといった戦時の補給線であるインフラ設備も攻撃目標としたため、これらの施設に勤務する、もしくは近隣に在住する多くの非軍属の労働者らも被害に遭ったと記録されています。

このことから、オーストラリア国内における排日体制は尋常なものではなかったことが想像されるでしょう。

コールドレーク司祭が日本への宣教を決意されたのは1939年のことでしたから、時系列的には、空爆前のこととなるわけですが、敵国であり、多くの同胞の命を奪った日本に対して、彼が志したこと、それは、第二次世界大戦への日本の参戦を思いとどま

らせたいという、主による平和を願う、強固な意志だったのです。

4. 伝道活動と宣教拠点の建設の歴史

1949年(昭和24年)から、宮沢寿兄宅で主日礼拝を守るようになった、伊豆伝道ミッション関係者らは、この頃から、「在伊東聖マリア教会」と命名していました。

コールドレーク司祭を中心として、伝道ミッションが次に目標としたのは宣教拠点の確保であったようです。

1949年10月、連合国軍が使用していた施設の一部を改修し、伊東市玖須美井戸川町の大胡宅²の敷地(現在の玖須美郵便局)を借りて、仮の集会所を建てます。この時、聖餐によって養われた信徒の中から、後に司祭となられる、宮沢寿兄が特志伝道師に認可されることとなります。

1950年、伊豆伝道ミッションは、オーストラリア宣教協会より、資金援助を受け、現在の土地に820坪の敷地を購入しました。少しずつ聖霊の宮である教会が整えられていく中、この年の10月に第一回教会委員会が開催され、伊豆半島伝道センターを伊東聖マリア教会に置き、組織していくことなどが定められていきます。

いよいよ、伊豆伝道ミッションの宣教体制が本格化していく流れの中で、これまで、小田原に居住しておられた、コールドレーク司祭は、伊東に居を構えることとなります。教区としてもこの動きを背後から支援していく流れができつつある時でした。なお、副牧師としての働きを務められていた飯田鳳夫司祭は、沼津に居を構え、三島を中心に伊豆半島西海岸での伝道を担うこととなります。

² 2019年時点の在籍信徒、大胡恵美子姉、ひな子姉宅とは別系統。

1951年(昭和26年)、戦後の復興に日本全体が精力を尽くしているこの時期、静岡県ホームミッションの働きが始まります。また、伊豆伝道ミッションにとっても、嬉しいできごとがおとずれ、前川主教により、最初の堅信者が与えられることになりました。同年、7月には、玖須美にあった仮の集会所を取り壊し、新たに取得した現在地に資材を保管、聖堂を建てるための準備が整ってきます。2ヶ月前の5月に建てられた牧師館で主日礼拝が開始され、牧師館の名前は、「聖マリヤハウス」と命名されました。

1952年は、現在の伊豆聖マリヤ教会にとっては、慌ただしい1年となります。というのも、仮の牧師館が新たに建てられ、主日の礼拝を信徒宅以外の地で守るようになったことによって「伊豆伝道ミッション在伊東聖マリヤ教会」が設立認可されことになるからです。まさに、無からの伝道活動が報われたということでしょう。資金援助をしていたオーストラリア宣教協会からも視察団が訪れるなどしています。

さらに、この年の12月には、現在地に解体されていたカマボコ兵舎の資材を用いて増築しました。

しかし、残念なことに、伊豆伝道ミッションの立ち上げに尽力してくださった前川主教は、翌年の1953年1月にご逝去されます。その志は、1954年(昭和29年)2月に新たに教区主教に就任された野瀬秀敏師父に引き継がれることになりました。1954年の2月、現在地に今の2階建の牧師館が正式に建てられ、祝福式が行われるとともに、いままで用いていた仮の牧師館「聖マリヤハウス」は、伊豆信徒子弟のためのホステルとして用いられることになりました。

伊豆聖マリヤ教会は、現在の教会組織とは異なる歴史があり、資料も完全にそろっている訳ではありません。また、仮の聖堂や仮の集会室と呼ばれているように、表現もまちまちで正確な情報をお伝えすることは難しいのですが、整理すると、以下のようになります。



- 1949年 玖須美に仮の集会所が建てられる。
- 1950年 現在地取得、資材を保管。
- 1951年 今の聖堂祭壇側あたりに、仮の牧師館「聖マリヤハウス」を建設、そして、1952年12月には、カマボコ兵舎の仮聖堂が建てられ、現代に近い形で聖餐が守られるようになります。
- 1953年 現在使用している2階建ての集会室と牧師館が建設開始。
- 1954年 現在の集会室および牧師館完成。

年収平均が都市部よりも少ないといわれている伊東の地において、伊豆信徒がまさに主のために努力をしながら歩んできた歴史が現在の伊豆聖マリヤ教会の原型となっているのです。

5. 教会の自立

① コールドレーク司祭の離任と教会のその後の動き

1955年から56年にかけて、副牧師として派遣されていたのは、

松本文司祭や、東直行司祭でした。伊豆半島全域に広がる家庭集会、いわゆる家の教会を主任牧師であるコールドレーク司祭を補佐しながら、伝道活動に勤しまれていたことでしょう。

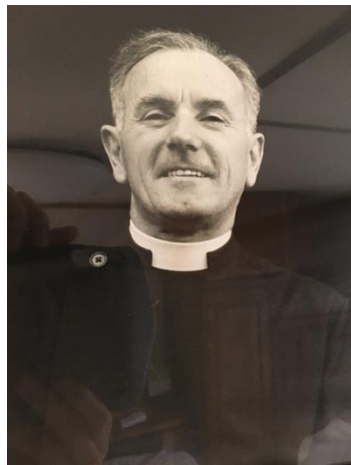
1956年には転機が訪れます。1947年から約10年間にわたって伊豆伝道ミッションに尽力してこられたコールドレーク司祭は、本国であるオーストラリアの伝道局長として招聘されたため、帰国の途に着くこととなります。この間、松本司祭は、オーストラリアへ留学。同じく副牧師の任を受けていた東司祭も、館山へと転任されます。

コールドレーク司祭の帰国を受けて後任として派遣されたのは、H・D・バトラー司祭でした。

1962年、キューバ危機が起こり、全世界が騒がしくなる中、宮沢寿司祭が聖職候補生に認可され、京都のウイリアムス神学館で学ばれることとなります。伊豆の地から輩出された最初の聖職志願者でした。この頃になると、伝道草創期の慌ただしさは薄れ、教会の状況は落ち着きを見せるようになります。

その最中、大変嬉しいニュースが飛びこんできました。伊豆の地から輩出された聖職志願者、宮沢寿兄が、当教会にて執事按手の恵に与ることとなるのです。この年には東京オリンピックが開催されていますが、当時の信徒諸氏にとってはその熱気以上に素晴らしいできごとであったことでしょう。

一方、オーストラリア宣教協会から派遣されていたバトラー司祭は、伊豆での任を離れることとなり、その後、新たな宣教師は



派遣されることがありませんでした。背景は定かではありませんが、伊豆の地での伝道活動がある程度の成果をあげていたことも、判断の一つにあったのかもしれませんが。

その証拠に、1969年(昭和44年)頃から、オーストラリア宣教会からの資金援助打ち切りについて対応するための臨時教会委員会が開かれており、1972年(昭和47年)には、資金援助の打ち切りが決定されました。伊豆聖マリヤ教会がいよいよ自力でその歩みを進めていく時が訪れたのでした。

②家庭集会

さて、草創期の伊豆聖マリヤ教会には「家の集会」というものがあります。つまり家庭集会のようなものですが、伊豆半島全域に広がる家庭集会は大切な宣教拠点として大きく広がっていきましました。

1956年12月までに設立された家庭集会は以下の通りでした。

今井浜集会	石廊崎集会
河津集会	岩地集会
下田集会	三島集会
大瀬集会	長岡集会
下流集会	瓶山集会

伊豆聖マリヤ教会の古い教籍簿を見ると、この時期の信徒はほとんどが、家庭集会の中で、洗礼を受けておられることが記録されています。コールドレーク司祭や日本人司祭をはじめとした草創期の教役者たちは、雨の中、強風の中、濃霧の中であっても、

その先に一人の信徒が待っていることがわかれば、どんな状態でも向かった、ということですから、聖職魂を感じずにはられません。99 匹を大切にすることはもちろんですが、1 匹でも大切な命ととらえ、伊豆聖マリヤ教会は各地に広がる信徒の網を大切な宣教拠点として考えていたのです。

現在のように、電車も、車も十分でなかった時期に、このような広範囲にわたって信徒をケアしていたことを考えると脱帽の思いです。

なお、現在、伊豆聖マリヤ教会のパリッシュで唯一残る家庭集会は下田集会であり、現在でも毎月 1 回、信徒宅をお借りして聖餐が守られています。

6. 伊豆聖マリヤ教会の新たな歩み

①本聖堂完成

1985 年(昭和 60 年)、八城昂一司祭が赴任されました。この頃になると、ワールドレーク司祭来日直後から伝道ミッションとして活動していた時期の色合いは少しずつ薄れ、教会は新しい世代が中心となるようになりました。信徒一人ひとりが考え、協議し、会



館内の備品等を整えていきます。

1991年(平成3年)には、春日隆司祭が清里より赴任され、宣教計画の充実と経済的自立を推進するための方策として、聖マリアハウスとして使用されていた古い牧師館を取り壊す願いが常置委員会に提出されるなど、新たな動きも見られるようになってきました。

特筆すべきは、1992年(平成4年)の本聖堂建築のための働きが始まったことでしょう³。

同時に、駐車場の拡張工事が行われるなど、この時期の伊豆聖マリア教会には、伊東の地に与えられたロケーションという賜物を存分に活かすため、信徒が苦心している様子がうかがえます。

そして、1995年(平成7年)11月11日に青空に映える赤い瓦を備えた本聖堂が完成することになります。新礼拝堂の聖別式には、教区中から200名以上の方にお越しいただき、伊豆聖マリア教会の晴れの日をお祝いしました。伊東の名産品でもある干物を持って各教会で売り、建設費の足しにと、信徒の方々お一人おひとりが神様にささげた本聖堂がここに誕生したのです。

決して大きな教会ではありませんが、伊豆半島に居住し、受洗された信徒、東京や神奈川より転居された信徒よりなっています。退職後、終の棲家として伊豆半島に居を構えた方々も多く、毎主日、静かながらも、祈りに満ちた礼拝がささげられています。

②新聖堂に凝らされた工夫

・ 玄関

³ 駐車場の利益によって聖堂建築の借財を返済することができた。また、その後の境内地整備も行うことができた。

玄関のタイルには、以下のギリシャ語が施されています。
デザインとして、これらは魚の形になっています。

l (イエス) c (キリスト) q (神) n (子) s (救い主)

・迷路

白と茶色の2色が施された玄関のタイルはよく見ると、迷路になっています。白いタイルをたどっていくと聖堂の中に行き着くという仕掛け。お時間があればぜひ挑戦してみてください。

・玄関前のブロック

半円状に広がるレンガ様のブロックは伊豆聖マリヤ教会を発信源として福音が広がるイメージをデザインとしたものです。

・聖堂内の十字架

正面の大きな白い十字架は、「釘打たれたイエス」像を付けずに、釘のみで表現しています。時間帯によっては、祭壇上にある天窓から光が差し込み、あたかも兵士の槍先が当たるようにも見えます。

③ステンドグラス

聖堂中扉を開くと、祭壇奥の真正面に据えられたキリスト教芸術の神髄とも言える2枚の美しいステンドグラスがささげられています。

そもそもキリスト教の芸術は、キリスト教が国教化されていた中世ヨーロッパにおいて最高水準にまで高められ、その後の全世界に計り知れない影響を及ぼしました。その根本にあるものは、

神への賛美、民衆の教化、そして、宣教・伝道といった3つの目的でした。大聖堂の建築・壁画・彫像・ステンドグラス、楽器製作、聖歌の作曲、祭儀のための染色やテキスタイル、印刷技術など、規模や形態は様々であってもその芸術的広がりには先の3つの目的に当てはまります。民衆の多くがラテン語で書かれた聖書を読むことができなかった時代、視覚的に民衆の教化を助ける手段となったものの一つがステンドグラスでした。

伊豆聖マリヤ教会のステンドグラスは1996年に、秦野聖ルカ教会の信徒・エラスト久永慎也兄(原画)と当教会の信徒であったヨセフ武藤甲二兄(製作)によって製作されたもので、1998年に新たにできた聖堂に奉献されました。

ここで、少しお二人の出会いについて書き加えておくと、武藤甲二兄がステンドグラスを学んでおられた教室に、久永兄がおられ、たまたまお話をしたところ、実は、聖公会(秦野聖ルカ教会)の信徒であったことがわかり、意気投合をされたそうです。お二人の出会いがなければ、現在の伊豆聖マリヤ教会にはステンドグラスではなく、壁が正面にあったかもしれません。神様の導きとはなんと偉大なことかと感じずにはいられないでしょう。

さて、本題へと戻しましょう。

原画の題材は聖書がテーマとなっています。祭壇両脇に合わせて12枚のパネルがはめ込まれており、相当の時間をかけて製作されたことが想像されます。

このステンドグラスの特徴は、多くの教会のステンドグラスがヨーロッパ調で、透明度の高いアンティークガラスに絵を描いて焼き付け、比較的大きなピースを鉛の線で繋ぎ合わせたものが多いのですが、このステンドグラスはアメリカのオパールセントガラスが多く使用されています。

アメリカのステンドグラスの歴史は比較的浅くはありますが、独自のガラスを開発、その半透明なガラスの表面に色々な技巧を加えたり、色を混ぜ合わせたりして高級なガラスを作りました。

そして、何よりの特徴は、これは専門の業者によって作られたものではなく、聖公会における信徒の手によってこの世に生み出されたものであるということです。

このステンドグラスが、神様を知り、より愛するためのお役に立てるようにと願って作られたことを覚え、わたしたちもまた、神に栄光を帰したいと願います。

ステンドグラスのパネル説明



『ノアの箱船』の物語が取り入れられており、外枠の緑のラインは、箱船を表現しています。一番上の絵は、左側に虹が描かれ、右側にはオリーブの小枝をくわえた鳩が陸地に戻る様子が表現されています。また、左右のパネルをみると、左にはアルファ、右にはオメガが記されており、神の目的が、イエス様を通してはじめてから終わりまで完成するよとの願いが込められました。

下の2段にはゆりの花が描かれています。「野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない」(マタイ6章28節)をデザインしたものです。

その他、聖書の物語が各パネルにデザインされています。内容は、受胎告知、赤い衣の天使ガブリエルが紫の衣を着たマリア様に手をのべている場面。また、馬小屋と飼い葉桶の中のイエスさまをマリア様が優しく見つめている場面。他にもエルサレム入場、ぶどうの木のとえ、昇天の場面が描かれています。

7. 三浦按針生誕祭

毎年、9月23日に伊豆聖マリヤ教会では、三浦按針生誕祭という地域の振興行事の中で三浦按針ことウィリアム・アダムスを覚えて記念の祈りをささげています。

1986年より始まった三浦按針生誕祭での礼拝は、当初、伊東按針会の代表者と親交のあった当時の日本基督教団伊東教会の牧師によりささげられていました。

しかし、伊東教会牧師の提案により、三浦按針が英国人であり、聖公会の信仰を持っていたことから、伊豆聖マリヤ教会が紹介され、約30年ほど前から伊豆聖マリヤ教会が中心となって式典における礼拝部分を担うことになったようです。

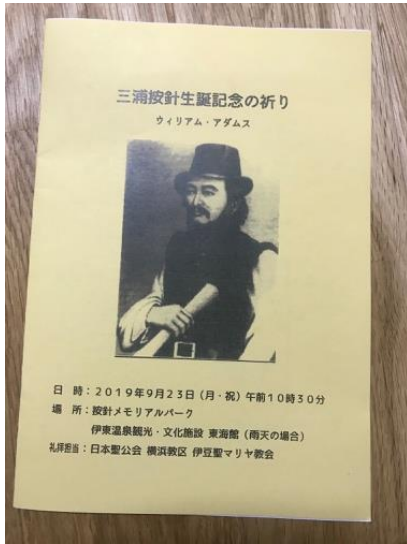
三浦按針は1564年イギリスのメドウェイ市に生まれました。苦難の極東航海の末に日本に漂着後、徳川家康の外交顧問になり伊東市で日本初の洋式帆船を建造した人物です。

伊東市では、現在、大河ドラマ至上初の外国人を主役に据えるという試みを実現すべく、地域が一体となって事業を進めています。

聖公会の信徒であったということから、私たち伊豆聖マリヤ教会が社会の中の一員として貢献すべく、お手伝いをさせてもらっています。

2019年9月23日の三浦按針生誕祭では、2017年に伊東市から交換留学生として派遣された青年が持ち帰った、「三浦按針生誕の地の教会」の壁や聖堂の石を、新しく整備された、按針メモリアルパークの台座に埋め込むという式典が催され、伊豆聖マリヤ教会が通常の按針生誕の祈りに加えて祝福の祈りをささげました。式典中には突如大雨が降り、式文、式服、祭具類もすべて水

に濡れてしまいましたが、按針が初めて日本の地に来たときの天候もこのような悪天候だったかと思うと、何とも不思議な縁を感じずにはられません。



8. 伊豆聖マリヤ教会の近年の試み

2019年現在、伊豆聖マリヤ教会は伊豆半島に居住し70年前の草創期に受洗された信徒、東京や神奈川より転居された信徒が中心となって礼拝が守られています。

退職後、終の棲家として伊豆半島に居を構え信仰生活を守られている方々も多く、また、観光地ならではといえると思いますが、他教区・他教会・他教派から礼拝に出席される方も多くいるということが特徴です。

2019年は伊豆聖マリヤ教会にとって特に変化の大きい年であったといえるでしょう。

①愛餐会食事当番の仕組み

長い間続いてきた、愛餐会の仕組みを信徒がより礼拝に集中できるようにとの思いから、当番制による食事作り制度をとりやめ、各自出席する方々がお弁当を持ち寄って愛餐会を開くという形が2019年に試みられ、現在では確率してきています。

ぎりぎりの人数で当番を組ながらこれまでご尽力してくださっていた方々にとっては、大変よい変化で、礼拝が終わってすぐに会館に移動し、大急ぎで食事を作らなければいけないといったことをしなくても済むようになりました。

しかし、この制度をご存じでなく、初めて来た方々への対応をどのようにするかという点については課題が残っているのも事実です。

②聖堂・会館の清掃制度の仕組み

聖堂や清掃についても、2019年以前は、1班～4班の制度が組まれており、1週ごとに当番の方が、聖堂掃除を担当されてきました。しかし、近年の高齢化と信徒の減少に伴い、この制度にも限界が生じてきており、協議した結果、第2週のみ言葉の礼拝時に、出席信徒全員で大切な聖堂を保全していこうという意見が強くなり、現在に至っています。

会館や聖堂を毎週清掃してくださっていた信徒の方もいる中で、近年では画期的な改革が行われたと言えるでしょう。

③教会委員の定数削減

信徒の減少・高齢化の波は、教会の運営に関わる教会委員の選出にも大きな影響を与えてきました。少しずつ、定数6名を選出することが困難となってきており、2019年にはついに欠員が出るようになりました。

そこで、教会委員会では、慎重な協議を重ね、これまで定数6名で教会委員選挙を行っていましたが、2019年11月17日に臨時の堅信受領者総会を開催し、6名から4名に変更することで議案を提出し、協議した結果、定数削減案が可決しました。

委員でない信徒も、神さまから与えられた賜物を存分に活かし教会を共に守っていくことがますます求められています。

2019年12月25日現在の現在堅信受領者は22名。決して大きな集いではありませんが、毎主日、信徒1人ひとりが持てる賜物をすべて神さまにおささげして、祈りに満ちた礼拝・工夫と努力が献げられています。

9. 歴代教役者紹介

牧師・管理牧師	補佐の教役者	嘱託
<p>1948年～1956年 F・Wコールドレーク司祭</p>	<p>1948年～1951年 飯田鳳夫司祭</p> <p>1956年～1957年 東直行司祭</p>	
<p>1957年～1964年 H・Dバトラー司祭</p>	<p>1958年～1963年 松本文司祭</p> <p>1964年～1966年 宮沢寿司祭 (伝道師・執事時代含む)</p>	
<p>1964年～1968年 山崎亀三司祭</p>	<p>1964年～1965年 松阪勝雄司祭</p> <p>1967年～1968年 竹内弘伝道師</p>	
<p>1969年～同年8月末 清水文雄司祭(管理)</p>		
<p>1969年～1975年 久保田伊作司祭</p>		

<p>1975年～1976年 久保田伊作司祭</p> <p>1976年～1981年 橋本克也司祭(管理)</p> <p>1981年～1982年 根本圭一朗司祭</p> <p>1982年～1983年 長野睦司祭(管理)</p> <p>1983年～1985年 三鍋裕司祭</p> <p>1985年～1991年 八城昂一司祭</p> <p>1991年～1998年 春日隆司祭</p> <p>1998年～2003年</p>	<p>1975年～1979年 河崎望司祭 (伝道師・執事時代含む)</p> <p>1979年～1981年 根本圭一朗執事</p>	<p>1975年～1980年 山崎亀三司祭</p> <p>1982年～1983年 宮沢寿司祭</p>
---	--	--

<p>橋本克也司祭 2003年～2007年 相原俊次司祭</p> <p>2007年～2008年 相澤牧人司祭(管理)</p> <p>2008年～2010年 大野清夫司祭</p> <p>2010年～2014年 大野清夫司祭(管理)</p> <p>2014年～2016年 三鍋裕主教(管理)</p> <p>2016年～2018年3月 松田浩司祭(管理)</p> <p>2018年4月～同年11月 姜炯俊司祭(管理) (*現・姜暁俊司祭)</p> <p>2018年12月～ 窪田真人司祭(管理)</p>	<p>2016年～2018年3月 窪田真人執事 (聖職候補生時代含む)</p>	<p>2014年～2016年 清家智光司祭</p>
--	---	-------------------------------

* 牧師欄・補佐の教役者欄で()なしの方は定住。

[参考文献]

1. 「南東京教区略史(二)静岡県の巻」
2. ひめしゃら 聖堂聖別 10 周年記念文集
3. あかしの大路-100 年のあゆみに学ぶ-
4. フランク&メイダ・コールドレイク・コレクション
～オーストラリアから日本へのミッション～

2020 年 3 月 25 日